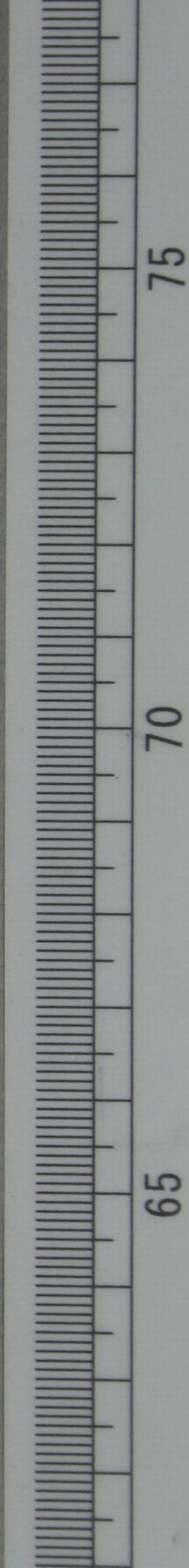




廣
相
千
句

忍菴宗師專噴筆

伊地知文庫
文庫20
18



寶治元年十月

文庫 20

17

才七

10

ヤ

1

4

伊地知氏書冊

寶徳元年八月自十九日至廿一日子句



十一

何船

新くせ秋
其いまは秋の廣拍

忍誓

鳥吹風や玉松のあり
 宗砌
 月影入軒の影庭秋とみゆ
 専噴
 山崎のけり遊のちりあり
 時述
 城の山崎の影庭秋とみゆ
 起心
 冬の日時由の影庭秋とみゆ
 龍志
 空の影庭秋とみゆ
 満綱

うるさき嵐の影庭秋とみゆ
 盛兼
 一本の影庭秋とみゆ
 来阿
 雲の影庭秋とみゆ
 功
 雲の影庭秋とみゆ
 詔
 雲の影庭秋とみゆ
 忍
 雲の影庭秋とみゆ
 功
 雲の影庭秋とみゆ
 原

さけや人の心はゆるり
さきよりのまよふを想ふ
あきらまの只の事
父母の生れぬるまで
しむ佛といふはけり
自徳を尊ぶ心の基
あきらけ入谷の夕ぐれ

後高 勉 就 感 生 心 忍

ゆきよのなれ一季のゆき
古のふゆさよ人も
氷つていくえり雪はふる
木葉の舞の下は朽ち
朽ちるはなをみし枯れ
たよりの水花の心
たよりの水花の心

忍 感 勉 就 高 後

結まふ乳の古き母の人
 片見たりぢやうんのみまはま
 われぬ月よのりる秋も
 宿のさる古川のよは旅ゆと
 きけいさふるお由きあり
 夕暮よいぢやる秋の風
 結まふ〜 柴運ふ人
 貞運 述 為 御 忍 砂 水

又〜〜を花あるさゆよ
 ま〜〜を花あるさゆよ
 何〜花城のあゆよ〜
 増子つらみ候の〜
 尋子つらみ候の〜
 こゝろありたる志水井の底
 こゝろありたる志水井の底
 砂 盛 末 詔 忍 水 新

ふくむもいかにあはれぬ
そのあはれにさうあつて
友もあはれむいかに大
おのれあはれぬいかに
けふの精進のまゝに
春のあはれぬいかに
ふくむもいかにあはれぬ

述 叙 思 却 結 砌

ふくむもいかにあはれぬ
そのあはれにさうあつて
友もあはれむいかに大
おのれあはれぬいかに
けふの精進のまゝに
春のあはれぬいかに
ふくむもいかにあはれぬ

述 叙 思 却 結 砌

持とスル。舞の入。白
夕日新班。こころのこころ
こころ。穴。白妙のこころ
郭。外。心。の。舞。こころ
人の里。わく。ま。の。こころ
仮。病。こころ。の。ま。ま。の。ま。ま
月。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま

劬 思 劬 思 劬 思 劬 思

多。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま
我。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま
新。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま
ら。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま
本。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま
弓。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま
掉。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま

劬 思 劬 思 劬 思 劬 思

ついでに神のついでに
春の夜更けの思ふ
あつたついでに
春の夜更けの思ふ
あつたついでに
春の夜更けの思ふ
あつたついでに
春の夜更けの思ふ
あつたついでに
春の夜更けの思ふ
あつたついでに

神思 神思 神思 神思 神思

夕の光 縮書 鹿子 芳立
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに
うさぎのついでに

神思 神思 神思 神思 神思

あつたあつたの作り人
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの

重武
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの
あつたあつたのあつたの

あつたあつたあつたあつた

杉江の如やふあふ木の事
述

忍誓七 龍忠九

宗砌廿二 満綱四

専次十 盛兼八

時述七 末河二

領心十 後喬四

厚秀六 京重武一

貞運一

何人

種彦

まき白のうらふ名取木

宗砌

ふらつきつて枝や葉隠
遠山の雲より暮れ
みせせよ如月入らん
波もみ秋の風と吹風
しん風の匂と香吹く成
なき貝柄の定と引とち
葉おとれぬ里の夕ぐれ

述原忍綱以執新

5
早秋のいづりくま
とむすそを葉茂る以
秋風の涼もけの旅衣
目もやうそ風をまよ
葉あたる跡の跡をこ
古葉とらなる木のた
花や知らぬの葉の朽れ

感東鴛砌思欠砌

とつらおほくのまは山里
詠ふも勝りあふ記由
中書とみくま入おの侍
持て學ぶ侍の内の也
者まはあはれ波もあ
物人儀のふあはれあ
とれあはれ心相の丸

忍 述 吹 御 厚 忍 紙

鳥羽田舎後庵の秋の昔
しつらとあはれあはれ
之紙あやあしあはれ
あはれあはれのあはれ
あはれあはれのあはれ
あはれあはれのあはれ
あはれあはれのあはれ
あはれあはれのあはれ

原 新 吹 御 忍 威 原

もりの枕さくさく
みゆきとあはれの木の葉のあ
らびのふりかへてそめさ
清きとほむお洞の川社
常よりくちん森のしつ死
路さみえなるや木の根
家ののこたへにさくさく

砂本思砂水新

物ぬきとさくさく
くさくさくさく
朽のる板田の泥の橋
くさくさくさく
秋の木の葉を折らぬ
はくさくさくさく
片の奥入の奥のこたへ

物原筆経物思水

西よんをうらむ行ひ
ほのそと我のひらき
手向すまはるのうら
やよふをゆきをゆき
ゆきゆきのゆきの
漕人七波の片杭の
破る月の細江の
新

新思ゆきゆき

行ふも秋のゆく
お紫くもれぬの
古き思ふの軒の
玉のゆきも
ゆきゆきの
ゆきゆきの
ゆきゆきの

思ゆきゆき

以未ゆらるまぬの居
た流の流ぬ梅の流ぬて
又みえんつひまきの花の如
古里の庭もや花の床も如
あうらの空にさるるも
心はあふれぬとせぬも
さるる法のいもやせし

は流物集来物流

ゆらるる流ぬの居
秋の風あつ山のこの空
戴の石谷のこの空
深のふりを流しぬ
亦有ぬあつて流ぬ
わねの流ぬと又流ぬ
あつた流ぬの空に流ぬ

物思は物流石流

待てき後のとれも折西に
取えたりとありまるとさる
とあのほろを底のくあふ
之能我の流あり日凡あり
をさ方とれく唐格と山船
おさるたれ人のあつて
ゆゑらきもあつこの里

感 賦 新 鶴 忍

待ててまよひよふあり月
はあつとあつたのあつたの
新鶴と山入船の新撰
ゆゑらきまよひよふあり
はあつたあつたあつたの
道草まよひよふあり
ゆゑらきまよひよふあり

感 賦 新 鶴 忍

浅海あま集六動を
信りおきぬり神あり神あり
ゆゑ岩戸の境とてこゝ
うらやみの月神ありての
たのちぬふゆれりおを
あまを牛車車のおま
まけいひあゝ人の車ひ

神御新思感御

うらやみの月神ありての
たのちぬふゆれりおを
あまを牛車車のおま
まけいひあゝ人の車ひ

神御新思感御

なごん 徳あき 甲を 徳子 頁

砌 七三 紙 八

迹 七 龍 八

厚 八 威 七

忍 十七 未 二

細 三 喬 三

順 十三 貞 二

中三

鳥

遊子 路

舟のうらみ 秋の夜

專順

木はさつさつと風の出る
おぼろけの光をいふは
まはるのまのふけは
城のえん中いふは
香るひまふくぬの
うらり時命いふは
うらり時命いふは

証皇述思砌細威

風車軒の杉の埋れ
ひまの光をいふは
海人のまはるの
何とせよと
まはるの光をいふは
うらり時の光をいふは
こころの光をいふは

砌思思砌皇来結

こよしの月あつる南無い誰
旅ゆありち地の東の秋候子
こよそそぬ月の明久の暮
あてもも居るそ自山あり
杉んをらん梅さくころ
貝接行の氷うち解そ
ゆづとすもや片早ぬ如

物心就思物厚起

尋ひのつひぬ何の如とぬん
たうのりもそ雪の音方
とみよ猶こりぬる山の奥
ゆもさきかた鹿を鳴る
ゆらるる海辺のふ田女のそ
月もくそぬ水は流
鏡の我も更ぬる新きて

思知物厚物思

此うゝあしき返るつ
そのくしきつらぬの中あ
より玉敷のつりる玉章
いふ只早んくしてきては
まらね海へつてき袂衣
垂ぬの道門よんをいつく
何しう海よみなる時あり

新 感 物 忍 新 厚

離るる妻の感に反あそ
おのこいしやれ学あらん
乃こいしつらぬのこいし
いせやくそあん松木きるふ
高松の道門の秋の霜
秋をよみあめやみ雪よみ
月よ輝けり木枯あつさひて

新 感 物 忍 新 厚

あふきかたはる 暁の雲
とまらぬ人の心はなほ
くちねの夢やゆきの現や
免くもそ三年世まよひぬ
古木の柳みどり 忘るは
枯果枝よ花をこころ
葉ころる ちれぬる 長山

鳥 厚 砒 報 此 思 貞

三

はさく 此 報と ちれ 報 此
河 此の 名と ちれ 報 此
我 此の 幸や 海よ ぬん
さ 此の 枕の 下の 行り ぬん
思 此の 物に 月更そ ちれ
まよ 此の 夢と ちれ 報 此
柴 此の 葉の なる 木 此の 葉 此

厚 砒 報 此 思 貞

枯葉おちしよよもつちの葉原
神領山つ山かのを消す
あむいまおさうもらん
旅のぶらぶら舟の遅き日よ
とくくくくくくくくくく
あむ念の珠とくく
くくくくくくくくくく

感 砒 体 忍 砒 結 爲

つりまふ結ていよま床の麓
なま月つ山とあらん
風をさふ秋の扇の早あて
やうも 芭蕉あかこひも
古寺のれいの葉の敷らそ
軒の燕とくくくくく
お懸て固せよおくま結

砒 忍 原 砒 砒 砒

若ふこゝにたつる其年
宮柱をたつたるを命と
天照神とてつて信人
里をぬれたる月をこゝに
此こゝにたつたるを命と
たつたるを命と
時あつたるを命と

威 砌 喬 砌 威 忍 吹
砌 喬

十
総より原の及是をこゝに
たつたるを命と
此こゝにたつたるを命と
とび谷水とつて命と
お解ぬれぬれを命と
お解ぬれぬれを命と
お解ぬれぬれを命と

砌 獨 忍 砌 厚 報 忍

越のあつらふはるるまは
吉野のあつらふはるるまは
此のあつらふはるるまは
持のあつらふはるるまは
布の外ふゆとすまは
あまのあつらふはるるまは
沖のあつらふはるるまは

越思次新思超体

長のあつらふはるるまは
夕のあつらふはるるまは
青のあつらふはるるまは
晴のあつらふはるるまは
くまのあつらふはるるまは
鳥のあつらふはるるまは
葉のあつらふはるるまは

越思次新思超体

くかひの森の上露
あふひおろ古の森の神成
新形もあつたの相書
あつた我説と更ぬらん
と新引もあつた山を
まゝあつたふきの影
りしなふあつたふきの元

雪 忍 新 厚 吹 砂 雪

雪解て軒のほ水あふ
氷のちやいささあつた
字のあつたこれ地のあ
あつたのふあつた鹿をり
あつた山に代人のあつた
あつたやあつたのあつた
あつた物あつたのあつた

御 新 砂 来 欠 感 趣

入やみまらうお國の
西と程とせんの月の秋
ら美らうとてあはしき
古心と旅とあはれの言子
なごうとてはなごうと
つと名をうらなふはは
無の未とあつとて玉

物思原起思次

結ひさるもあはしき
雪の危るる山の井の
白雲の影とては鏡
月とてあはしき
けしけしとてあはしき
あはしきとてあはしき
あはしきとてあはしき

結起物起思起原

君がから入秀の立田
鳴らまゝをさすおれは物山
神よとらひぬと出る神人
いふ梅枝の流るまゝ
新のいそげ梅枝のさるん
夢に先つあふささあそ
告るぬさや里の鶴

新 思 物 厚 新 思 次

三

見し夢のいふささあそ
さしき新しひさの山川
柳ささいぬささあそ
以榮車つくりおれん
行ひてはまの事をつじあを
いふ物くのささあそ
花智えりあふささあそ

新 思 物 厚 新 思 次

時ふいせしあこからる書
 月ももけるも増る我を
 都居るる山の傍中
 横るる比良のねさし書
 引引のこま小松ぬん
 けの入破の妻母こころえ
 河大方ももきき二月

原 忍 素 各 厚 次 起

香くらふも秋波の甲中
 平井の字の坊とよみし
 神功の結きあはれいくし
 赤くももては秋いのも
 赤くももつた人程もき
 妹より書子約の足あこ
 つき字もはむるをひくも

忍 起 貞 忍 厚 原

洞のじやふまぬくの地
東ののちかたやうの年迄
越えん山の秋やしらし
あのをう園の極糸をみるぬ
ゆゑのちをいふや百古を思ふま
りまゝのつくりをうり守るや
とれらるゝ風の赤あじあ

為明新述思柳獨

⁺漢のつゆのつらみあつて
ゆゑの漢道は猶よるの波
とれらるゝ潮の音は碎くる
敷のらるゝ山の海はあし
勢をうり了れつうの葉の度毎
度立るゝ山をいふまゝ
秋をいふれつうのちあ

明述柳思新述

月よ別れしつらきこのこころは
 寂しき森の下葉と踏みて
 いつらつちえ残るる細片
 まきのほめたる方い海り水
 石りの波を流す
 柳向此あつきぬら風
 里いりの竹田を羽山
 野原 来 鳥 砌 欠 跡

人目れいし海をよまきさ
 毒のいよまらうしよまのま
 物まあむ建寺のたるるれ
 おれさるやふぬなるるる
 けるる徳の長毛の風さ
 白波こあるひの亂葉
 水ときこぬの月もあぬ
 野 原 来 鳥 砌 欠 跡

秋をらばるる民の歌

終

龍	厚	順	砌	喬	述
十一	九	八	六	八	七
来	貞	盛	起	細	忍
四	四	二	七	四	六

才五
唐

亂
我東宮
徐辱

厚子秀乃

神分のあはれなるよきうら
秋のやぶをばれ日入て
田舎より不圃の里人
おまを産くはらやゆき
つしききききわらのつら
岩舟ふつしきあはらて
うねの秋のあはらて

網忍龍砒述感

あはらて秋の月のあはら
秋のやぶをばれ日入て
田舎より不圃の里人
おまを産くはらやゆき
つしききききわらのつら
岩舟ふつしきあはらて
うねの秋のあはらて

網忍龍砒述感

酒のちやんくつれまき
まじりさくくぬらるん
折み垣の山里の梅
きくけ果枯る念の枝
まきぬわらひるの聲
袂さめきとあまの調
よりの衣よ清角をん

新厚切新切

月白に波を海つらぬら
秋露るひきをまじり
涙をこぼし梅をつらぬ
軒とあまの里のあ徳
雪をくくぬらるん
まじりさくくぬらるん
まじりさくくぬらるん

新厚切新切

えんしめゆね原うそ
とふれあつてふの船のた
きしとるをうらみの山
暁の舟の心藏りやうれを
舟とあつて舟の魚の箱
たき舟の舟の舟の舟
やうれとあつて舟の舟

来帆物思厚物帆

舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟
舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟

おろと物影のよめかき
反響し山嵐の静よき
病しとほそく獨あつる菴
秋風のちかきうらふまき
海よや荒の書あしをらん
我こそは物とぬの月あつる
まのまき又うらふ物影

物影思物思物思物

し
物影や秋の静よき
とほそく物とぬの月あつる
我こそは物とぬの月あつる
まのまき又うらふ物影
物影思物思物思物

物影思物思物思物

波急の里の暮のくれ方
花に影緑もあふ葉も
秋のそらに二月の月
雪浪も水急の風の吹て
ひまのひかる陸の碇の
波の立浦の浪のうねり
夕暮のあはれはつく船人

述次原東砌就起

雪のつらさのこころ
いよおぬこころあはれ
大以えお海に土をみ
くちのあはれやほのほ
よよあはれを釣の釣
新もこころあはれ
あはれお海に土をみ

述次原東砌就起

あしからし月の影をのりて
日し照る北の山の上の秋
赤き花の白川の雲
別りまゝあるとよのあはれ
ほかにいそぐ宿の古の
水たまりの池のほとり
霞みよのなまじの物

思 就 思 柳 柳 柳 柳

十
海の底にふたりの森の夕暮
舞をよそをのそらるる
我國をよふ旅の途こも
ゆきあきらむる時刻
つまねの山とてさるるあはれ
室の戸とつるよの光
遊女を映しよるらん

思 就 思 柳 柳 柳 柳

此と云ふは海の下級
其より井子の山頂を
由て山頂の神もぬき
其を海ありしころ海
海山をの尾止りて
海ありし下海ありし
柳の橋のりしにあり

忍感 忍感 忍感 忍感

妹や位にわが門のあはれ
そのひらきとてなるは
おろき木なりあるは
其を等しきもの入おの
秋を只送りしころ
いそと神よりとて
桐の葉の流るる井の水

負 為 厚 吹 就 詠 砌

啓てふに猶よ出る頃
 夕月と暮とや密の道も人
 星のゆきよふきりこもあれ
 山とてふよこせの林もそ
 水のとてふよ記さへあつて
 風とせの空の雲のなきは
 人ともせぬみこふる里
 貞 起 思 述 明 礎 厚

昔は昔告あつたか
 小つとつたれ梅もあつたり
 先も先人の花のなす所
 根もあつたような水も
 根もあつたような水も
 中におよばぬあつたり
 浦もあつたような水も
 誠 礎 明 記 礎 感 誌

じつとるにきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく
きりくもし思ひきりく

思 順 原 新 忍

そらもつ田舎の氏の津は
のり部の上の坂
のり部の上の坂
のり部の上の坂
のり部の上の坂
のり部の上の坂
のり部の上の坂
のり部の上の坂
のり部の上の坂
のり部の上の坂

思 忍 鳩 木 忍

しをわらぬやまのり未
仙人のぬれあをを名あし
せのまはるる風いせい
の影のふ東のうらふ秋の家
少結をよめきぬのころ
たををいひく限もきぬ
はうらまひく狐の影

物語吹雪述砌色

くらさきの婿を血もけり
はうらまひく狐の影
法院の法末の世にの影を
くらさきの婿を血もけり
唐土の路やゆきまら女
ゆきまら女を血もけり
まら女を血もけり

吹雪述砌色

夕にやまよる風をゆき
消ゆるは破波のより船
病をもしまぬ杖をりり
舟ありぬる舟底板底
樹の廣に敷るさしけ
旁の舟は山松の葉にて
峰の本壘をたこりり

砌忍帆亭為新瑞

^エ火中より残るやまをたぬ
ゆきまはるよれぬ大空
風をたぬ杖をりり
一舟白き沖の離れ
そとさる其中川の舟をり
忍ぶ車のこころをり
何れのもろく掃き

砌題厚為忍就感

都のさきしるのさき
本家次鬼の風の音羽山
城とてなみけの并
東より年をまよひて
西へあつた月のとれ
方おすおむ入口氣
ゆとも物さお國のた

此来思御本御思

行きのさきしるのさき
とやゆ方とさきしる
都らおつたれあす
衣よりあつたれあす
ゆさきおの旅人あや
んをとむる秋のそ
後さおあすしるあ井川

御思執就厚為御

痛みのつらさ
はらひよせよ月夜
洞のからみ
魚のさかすか
ゆふとあけ
花のさかすか
まはらばあけ

思恋 花 物 也

山をくま
ゆめの路
あけたい
月しな
秋の只
子のお
枯より

思恋 花 物 也

いさやこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ

物思物思物思物思

あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ
あつとこゝろおれおれいさ

物思物思物思物思

引物浦すの船のともは
お

龍十 砌十九

貞一 夏八

超七 盛六

忍六 喬六

迷八 来二

順十 網二

中略
三字

池水乃

玉原六月の鏡

字砌

ふらふ波の花の結風
を湯はる湯の通路詠きて
とありふ心やをさうさう
山陰の物りぬちさう
うさまのたのまの
麻衣ぬも計よあう
梅うさうさう

順 香 結 素 網 足

あはれもさうさう
さうさうのさうさう
説とまげ法の道の水月
ゆやゆみの帆網と
ゆつろの箱の風さう
綾の着のさう
衣う国道の月たを

御 原 香 物 述 帆 衣

外山の麓のきつとていへ
武蔵野の果なき方の中は
あまも葉のりたるやまに
り方と早の道ゆくまは
霧山吹の中へのぬ
きよよとのうふれとて
海をえりまもきつとていへ

鳥 歌 思 感 結 功 有

百五十五
百五十六
百五十七
百五十八
百五十九
百六十
百六十一
百六十二
百六十三
百六十四
百六十五
百六十六
百六十七
百六十八
百六十九
百七十
百七十一
百七十二
百七十三
百七十四
百七十五
百七十六
百七十七
百七十八
百七十九
百八十
百八十一
百八十二
百八十三
百八十四
百八十五
百八十六
百八十七
百八十八
百八十九
百九十
百九十一
百九十二
百九十三
百九十四
百九十五
百九十六
百九十七
百九十八
百九十九
二百

思 厚 吹 砌 迷 忍 吹

蕙々々々々々々々々々々々
如月山あかきと月々風吹て
こよひもいさひ音行もせり
をるも山をのこを吹ては
詠みしこも別り来
友影もあのかよこまはて
我又秋方と吹くも居

吹忍速砌越御就

神のまは地い梅を筆文
ちちねの好きと花の咲以
字人の地の遠風おる月
虫えらふてあつさあり
菊もも秋の小を花もよ
こよひも井の月をいさひ
こよひもいさひの甲の元は

秋忍速砌越御就

能引唐の船の舟中
影ひきよなる人の徳ん
君う初よ遊いし
神ぬる由さ汗のぬき
翁も事しき木の舟の翁
柳の青くそ初るる女の心
うらむ心その心を舞しき
鳥吹給物給物給

三

うらむる流河の瀬を流して
うらむる如く初るる人
是るる月やうく夜の子
初るる酒の秋の心花
底きききと初るる禁火の心
あつみより子よさふぬら
此の古菜初るる初るる
来給物給物給物

きこゆる波の言砂の浦
待たぬとてさかぬみぢ
けしめ別れこれい通まん
花の戻りも氷圍の重きれて
うらの郭とまきもとらん
程も無睡月二月うら
只ふとのこもあじむる如

新砌本忍厚帆船

船おきよ洋くら浦の船連
いづれこも船にぬれらん
歳あつた字の好ま逢ぬん
けしめの居りの船の橋
ぬじふ林の上さくらおて
そきくえやあははらん
早急ぬきの建ちり一虎

忍威砌厚帆船

ふる秋下の此この小車
引をく接心のかのゆきよ
海よりこの船のゆく
海海と作り代々のゆき
ささるるゆきや海の白き
飛消るゆきの名数と
とよみよとく人よとく水

述帆物走石路帆為

ナ
こう運ぶ心よくも心かき
まよとく運ぶ心の下
ゆきや海とくとくは美品
ものさきのゆくよとく
舟人のゆきとくよとく
別の秋のゆきよとく
お飯の山とくゆきよとく

延物思延路帆忍

夕陽の浦風
 多田ふみむけのつら松
 ふらふらいひゆいあくとゆる
 誦つらん昔もよこぬ此夕
 とつて今も清くともうけ
 多ふも那ふもきほの學
 うらむらむらむらむらむら

原 初 臨 忍 原 就 有

恨めしき其のうらみの定事
 うらむらむらむらむらむら
 角とつる牛乳のこぼれや
 多ふも那ふもきほの學
 夕陽の浦風
 うらむらむらむらむらむら
 多ふも那ふもきほの學

有 東 本 就 初 忍

以のきあ子國をあらわす頁

砌十九 綱三

順十一 起九

喬八 厚九

龍十 述七

忍十六 威二

来四 貞二

中八

何鳥

みし紙あふ裁い 忍指言

蓮や三秋の如く疾如

あさまのちの床夏の秋
月くまきまの秋のあま
山部ちのあまのあま
いあまのあまのあま
仲こまのあまのあま
波城のあまのあま
あまのあまのあま

盛明 船 碇 碇 碇

打ちの猪場のあまのあま
あまのあまのあま
あまのあまのあま
あまのあまのあま
あまのあまのあま
あまのあまのあま
あまのあまのあま

碇 碇 碇 碇 碇

ありの丸尾の寄るあり
 控多やとより中よりありて
 うら水はらりて早もあらぬ
 家籠りてぬき事一昔
 又松人のむふ山口
 花は只ら冷ま茶の標と
 暮き入る流の川流の里
 忍 結 厚 結 忍
 御 忍 結 厚 結 忍

ありぬけの流の寄るあり
 氷のうらりて早もあらぬ
 家籠りてぬき事一昔
 又松人のむふ山口
 花は只ら冷ま茶の標と
 暮き入る流の川流の里
 忍 結 厚 結 忍
 御 忍 結 厚 結 忍

あられおる中の通路
誰よりも深き谷の人のま
いつくさき山崎とつらあよ
まよふる程をくまきま
やまの折のくまきま
まよふる程をくまきま
あられおる中の通路

忍 結 為 砥 思 次 砥

あられおる中の通路
誰よりも深き谷の人のま
いつくさき山崎とつらあよ
まよふる程をくまきま
やまの折のくまきま
まよふる程をくまきま
あられおる中の通路

感 忍 厚 来 砥 次 忍

毒の衣に目もさしつゝ
夜もねね行人の心もあまら
寝んそつときさしつゝ火の影
うらむる玉の結糸のたま更
そとあつる圍の夕丸
ゆと 層の月女の御傍
つゝあつる影とよあつる行人

物末忍 結 結 物末 忍

三
ほの葉のつぎうきなま葉も
そんそんせの川はくわ川
あつるほの水やあつる人
そとよほま流りこつ
物もあつる意のよきあつる
そと入海の船の影
よ女のあつるつゝあつる

物末 忍 結 結 物末 忍

くまのこゝろ又しくれまぬ
秋の月よりぬる秋のそら
はさげをたてふのいと
上枝の枝のひまは家も
あつたまゝの川の川上
あつたまゝの川上
秋の月よりぬる秋のそら
はさげをたてふのいと

秋の月よりぬる秋のそら
はさげをたてふのいと

のこゝろ又しくれまぬ
秋の月よりぬる秋のそら
はさげをたてふのいと
上枝の枝のひまは家も
あつたまゝの川の川上
あつたまゝの川上
秋の月よりぬる秋のそら
はさげをたてふのいと

秋の月よりぬる秋のそら
はさげをたてふのいと

月いさるのり田土の山
川旁いさるの水の井裏を
船をさる船のきりもさ
精國友はつらさきり
ふつふつやれやわさ
えのささつさあ文にさ
ひよのひさささささ

厚 功 連 忍 来 次 切 連

+

夢のそもたつ度とささ
年よささささまの別路
志のやあさささささ
ささつさささささ
に保つあささささ
見ささささささ
古寺のあさささ

忍 電 連 忍 就 切 切

さしやみく人芭蕉ゆめ
仙のさるや男流の革衣
もろもろの葉の殺し木立
誓ひさし及み枝をかまそ
くささるもく老の一坂
名を部たに田舎よまら
妙女のち法なるやまら

忍 柳原 貞 就 柳 忍

櫻 咲 葉 茂 る 池 の 池 ありて
神 山 山 深 心 なる 本 日 勿
ね 志 六 祈 る ころ 共 朽 ぬ る
我 身 を と 移 ま ころ 様 の 明
月 よ お ち ぎ る ころ も 花 物 を
あ や 洞 の 大 原 の 川
早 山 我 ころ 流 の 里 ぞ ぞ

忍 貞 務 建 柳 来 柳

山の勢を
おろし
馬人
呪

忍九廿一八順七七八

厚九 威七六七

親十 迷七

細三 超五

砌七七七 未七

香三二三 貞一

中九

何人

枝や子忠

お染の梅り木は秋

超心

昔もふ杉や風りりしん
庭はる谷の安信水神
川、庭ある峰のひけり
猿さるるさるき流のそ
わろき月よゆれみさる
枕る少雪の庭軒あれそ
さるやうぬ我ともあらん

末 盛 厚 吹 忍 本 砌

ふこをさき部よりうれ
見しはらうね年この花
末はれいそをあめの山岳
やゆしそあめあまのしき
城信門ゆの陸ありあ
水さる板井や結持らん
花秋の面影じふたるあ

喬 龍 順 砌 龍 厚 忍

此吟不木と云はれ
吾り名ナシ

結人の来月、ついで幸り
高僧の杖のく風をよこし
つと来まよふ山中のこころ
見ぬ方よ、念の糸いあがり
頼れ、おのこころをさへて
亡うけほのせ、こころあらん
答の是の歎、こころに那

唯 唯 唯 唯 唯

二
吳井の籠よりあつと城より
まつこころ命いよあつと
人、只まよふれや、こころ
小夜更、つと、おのこころ
東路や、おのこころ、おのこころ
うり物、つと、おのこころ、入
まよふ、おのこころ、おのこころ

思 給 思 給 思 給

くまのこゝろあはらふなり
所板より此もあはれ麻衣
本もれ水河を流く流し
約とそ水河出かけあれや
さうも海とこもる旅人
ひきの衣を定めあそびよ
すよとらうきん也し

素 砌 忍 原 述 順 貞

つとむるあはれ親子のあはれ
初冠よりあはれさうき
あはれとそ水河出かけあれや
おのれもあはれとそ水河
仲つとむるあはれとそ水河
あはれとそ水河出かけあれや
あはれのあはれとそ水河

砌 總 忍 主 砌 順 超

おとこくらの秋をきん
もみぢみんあしきん
矢さびなきる荒のつれ
こぢみんあしきん
枕さきんあしきん
さきんあしきん
さきんあしきん

厚物就思物述

三
姉めれと清姫の玉の光を
さきんあしきん
さきんあしきん
さきんあしきん
さきんあしきん
さきんあしきん
さきんあしきん

新思物思物来思

梅らるるほの梅さくは
花とてあえつくはまの丸
うろしやぬるものささる
此浦のゆめの小舟のゆき
伊勢の海辺の月夜きく
あつたつたのなをささる
おもしろのなをささる

新 砌 感 超 喬 總 忍
新 砌 感 超 喬 總 忍

枯のるま地の舟のゆき
さくはまの丸のなをささる
あつたつたのなをささる
おもしろのなをささる
おもしろのなをささる
おもしろのなをささる
おもしろのなをささる

忍 順 圭 原 砌 總 忍
忍 順 圭 原 砌 總 忍

まゐるゝめりあゝあゝあゝ
ほれぬをさしこゝろに夜
新田の山は新を越しき
白波のよるれおをい月はれ
庵をらるぬま折ゆし
美理の塚の古伝みほり
まゐるゝめりあゝあゝあゝ

鳥 忍 述 砌 忍 超 石
子 子 子 子 子 子 子

白の丸の丸の丸の丸の丸
ゆもこゝろにまゝにまゝに
菴の物よはるるの物よは
おのゝろをぬんぬんをぬん
れ結そ目をさるぬぬぬぬ
名は丸の丸の丸の丸の丸
まゐるゝめりあゝあゝあゝ

砌 喬 順 圭 忍 述 麗
子 子 子 子 子 子 子

乃あくやまのりなす月新

原

忍	順	厚	盛	未	超
十七	十三	九	七	四	七
被	綱	貞	喬	砌	述
十	四	一	四	七	十

二十
二反音

松子屋
新八巻下々外

宗砌

末節をこの第にいくぞ
七月の嘉祥山段神あり
秋の空を白くする
秋の空を白くする
秋の空を白くする
秋の空を白くする
秋の空を白くする

思 述 東 厚 吼 類 鳥

解て猶言中なる所
雪の帯は梅の影を
秋の空を白くする
秋の空を白くする
秋の空を白くする
秋の空を白くする
秋の空を白くする

喬 忍 順 砌 新 集 延

女もせむしやうま
花の心は馬と駒の心
つれづれはまじりてまじり
大なることばあやうき
鳥のうらみの海のとけ
新あそびの池の底
月夜やうきを鳴らす

龍 忍 順 砌 速 順 超

二
あうもなまはれに
古き秋よまじり
新しき秋よまじり
あうもなまはれに
あうもなまはれに
あうもなまはれに
あうもなまはれに
あうもなまはれに

忍 原 砌 忍 忍 忍 忍 忍

えいせいりんをいしよのまを
光海山房のあつよまを
たよめりやう柄あるん
おせいりんおしおるま馬友
はらわりのたろのあつ
あつよまをいしよのまを
あつよまをいしよのまを

光海山房 忍 御 念 忍 然
忍 御 念 忍 然

秋の風待下葉らつら
あつよまをいしよのまを
あつよまをいしよのまを
あつよまをいしよのまを
あつよまをいしよのまを
あつよまをいしよのまを
あつよまをいしよのまを

忍 順 御 超 喬 忍 順

くまのいづまより現う
まのまの梅のしものを
那のつらぬつらぬ山
あゝくぬぬ角ふた
く旅人の憂ふとあ
神をまの神をうの痛
山をまのやうのうの

原 御 忍 述 順 御 總

三
遠くくつあつる
神のつらぬつらぬ
梅のつらぬつらぬ
あゝくぬぬ角ふた
我々の梅のつらぬ
うのつらぬのつらぬ
寺のつらぬのつらぬ

御 忍 述 原 龍

このよのまのほろ風西に
朽木のこゑとむしよのこゑ
さらよまなきそのそらに
ほろろと舞ふやうとおぼし
きりしきり方旅の片道
以海同しやうよあさ
あはれおぼしむるの浦

新 忍 柳 順 末 喬 順

はてそをゆき部へ去る
まげ部へ去るゆきの
つらき道人のまじり
月影むしよのこゑ
夕の雲のまじり
神よ風や水とまじり
花鳥のまじり

忍 迹 柳 忍 柳 護 超

あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒

原 橋 順 述 御 忍

十
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒
あまのこゝろの軒の軒

順 御 忍 述 橋 原

そよ風吹くこゝの船人
ゆつりききの かにほし
ゆ代の事をいふはなほ
周の名の水手ゆつりか
病へのおらぬはうあふん
とあつ君月もたつとあふん
風さよふくあつとあふん

起 原 御 忍 龍
起 原 御 忍 龍

橋の戸はきかぬ体くらん
ゆつりききの かにほし
ゆ代の事をいふはなほ
周の名の水手ゆつりか
病へのおらぬはうあふん
とあつ君月もたつとあふん
風さよふくあつとあふん

起 原 御 順 喬 迹 忍

不及沙法後見人其意可法後
勉結三也

宗砌

天保八年丁酉十月廿九日

敬

